

04・恋の終わり（あるいははじまり）

一週間前。『03・告白とキス（獲物の仕留めかた）』から三週間ほどたったある日。  
十月下旬。時間帯は十八時ごろ。気温は十六度程度。いよいよ寒くなってきた。  
天候は雨。視界が非常に悪い。

SE1 .. 雨の山の環境音

【最初から最後まで流す】

【トラック終わりまで繰り返し流す】

【0―5秒ほどまで流してSE2】

SE2 .. 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【セリフと重ねて、規定の位置まで流し続ける】

主人公と妖精さんは、今、大陸東部にある山の中を歩いているところだ。

数時間前、山を登るところまでは、とてもよかった。

主人公は予定時刻よりも一時間ほど早く山頂にたどり着き、かなり余裕があった。

この先天候が悪くなりそうなのは不安だったが、二人は『この調子なら何とかかなりそうだね』と笑っていたのだ。

だが、さっきから雲行きが怪しくなってきた。

サリアが事前に調べておいたチェックポイントに、到着予定時刻を一時間過ぎてもたどり着けないのである。

その上雨が降り始め、だんだん自分たちが今どこにいるかもわからなくなってきた。認めたくはないが、完全に道に迷っている。

それだけではない。さっきから、機械人形の調子がおかしい。

メンテナンスを怠ったせいか、集音機能が低下しているようなのだ。

すぐそばにいるはずの主人公の声が正しく聞きとれなかったり、かと思えば、突然本来よりもずっと大きな音で聞こえてきたりする。

ただでさえ、今日はサリアの体調が悪いというのに……。

はい。そうなんです。サリアちゃん、いよいよ限界が近づいてまいりました。

そろそろ休まないと本当にやばい。

寝てなすぎて、一日中心臓がバクバクして、呼吸するだけで大仕事だ。

判断力が落ちて、一つの物事を考えるのに、普段の何倍以上もの時間がかかる。

頭がぼんやりして語彙が減り、代わりに指示語が増えて、思っているような説明ができない。

手元がおぼつかず、物を落としたり、正しくボタンが押せなかったり、ケアレスミスを連発したりしている。

おまけにこの安定しない集音。頭がガンガンする。

……まずい。このままだと、本当にまずい。

このところサリアは、主人公と過ごす以外の事をほとんどしていない。

まず、この通り体調不良が続いている。なので、仕事量はかなり減らしていた。

だが、本来就業に使う時間を主人公のサポートにあてるようになったので、ちっとも疲労が回復しないのだ。

かといって、まったく働かないわけにもいかない。

貯蓄がないわけではないが、またいつ主人公に必要なものができるかわからない。

その時はすぐにプレゼントしたいし、主人公に貧しい女だとは絶対に思われたくない。

……それ以前に、こんな生活が続けていたらお財布が空になるのは時間の問題だ。だから、できるだけ頑張らなくてはならない。

それでも、サリアがさっさとお金を作る方法の一つだけあった。

それは、とある薬を作って売るというものだった。

その薬の製造は難しく、かなり高度な技術が求められる。

だから、サリアほどの腕がないと、そもそも完成させられないという、貴重品なのだ。もしそれが前向きな用途にのみ用いられる薬なら、サリアは喜んで量産しただろう。

だが、サリアはその薬を試しに一つだけ作るにとどめ、結局売る事はしなかった。想定される用途が、あまりにも恐ろしいものだったからだ。

もし主人公が、この薬について知ったら、きっと眉をひそめる。

それから『そんなものを作ってはいけません』とサリアを叱る事だろう。

だからやめた。サリアは、主人公に嫌われるような事だけはしたくなかったのだ。

薬はサリアの薬品庫で眠っている。きっと、生涯使う事はないだろう。

水晶球に映る自分は、ひどい顔をしている。

これでは、最初に会った時の主人公並みではないだろうか。

でもまあ、サリアちゃんは引きこもりだかな。

どうせ誰にも会わないんだから、多少見た目やばくなっただって関係ないよね。

今のあたしは、自分のルックスより、この子の安全を守る事の方がずっと大事だもん。

ああ、頭が痛い。目が回る。呼吸をするだけで、ズキズキと意識が遠ざかる。

栄養ドリンク的なものでドーピングしまくって、ギリギリだ。

それでもいよいよ魔力が尽き始めている。

実はもう……遠見の魔法を使えないくらい疲れている。

だからあたしは今、主人公ちゃんはどこにいるかわからないまま、会話から得られる情報だけで山を抜けようとしているのだ。

何とかこの場を切り抜けなきゃ。

あたしは主人公ちゃんの頼れる仲間で、お姉さんの存在で、先生でもあって。友達で……それから、恋人なんだから。

〈主人公〉

「……妖精さん？」

そこで、主人公が話しかけてくる。

さっきから、似合わないほどおとなしい妖精さんの事が心配になったのだろう。

「急に呼ばれてどきつとする」

えっ？」

〈主人公〉

「大丈夫ですか？ さっきから何回も声をかけたんですけど、返事がないから……」

……まずい。全く聞こえていなかった。

今のサリアには主人公の顔が見えていない。

だから、妖精さんを見つめる主人公が、どれだけ心配そうにしているかもわからない。とにかく、この場をごまかさないと。

「【かなり体調が悪い。だが、できるだけ平静を装う】

あ。う、うん。平気。大丈夫だよ。聞こえてる」

〈主人公〉

「あの、妖精さん。もしかして、魔法が使えてないんじゃないですか。

だってもう、何日も休んでませんよね？  
……ずっと、私と一緒にいてくれたから」

だけど、主人公は察しがいい。

サリアの不調だけではなく、魔法すら使えていない事まで察しているようだ。

しかも前述の通り『見える』だけではなく『聞こえる』の方もやばい。

まず、機械人形のスピーカーは無事のようにだ。

サリアの声は、まだ問題なく主人公に聞こえている。

だが、逆がかなり厳しくなってきた。

聞こえる声は音量が狂っているだけではなく、かなりのノイズ交じりになってきた。  
なんとか主人公の声らしきものを聞き取るのが精いっぱいだ。

……これがバレるのも、もはや時間の問題だろう。

サリア、観念して、とりあえず『見える』に問題がある事を打ち明ける。

「【大した事ではなさそうにふるまい】

あは。お察しの通り。

機械人形の調子が悪くて、周りを見る力が弱まってるんだよね。

【とても申し訳なさそうに】

ごめんね、索敵できなくて。話す方はできるから」

〈主人公〉

「いいえ。……私の方こそごめんなさい。

あの、私のせいですよ。私が、妖精さんと離れたくないって、わがまま言ったから。だから機械のメンテナンスができなくて、調子が悪いんじゃないかとあります」

ああ、ついに言わせてしまった。『私のせいだ』って。

こうなったのは、すべてあたしのせいだ。

なのに、勇者ちゃんとは絶対『自分のせいだ』って思う子なのだ。それをわかってたから、こうなる事だけは避けたかったのに。

どうしてこうなってしまったんだろう。

【必死に否定する】

ううん！ あなたのせいじゃないよ。全部私の体調管理不足が原因。



【明るく振る舞う】

すぐに良くなるから、あと少し頑張ろう。

【少し間をあけてから。優しく気遣う】

大丈夫？ 寒くない？ 長時間歩いて疲れたよね。

この山さえおりられれば、街があるよ。

夜はゆっくりお風呂に入って、温まろうね。

【何とか主人公を元気づけようとしている】

……それから、またベッドでいちゃいちゃしようよ」

〈主人公〉

「妖精さん……」

主人公の声が明るくなる。

サリアはホッとして、なんとか『妖精さん』のキャラクターを保つのに成功する。

【明るく優しい声で】

暗くなってきた、ちょっと怖いかもしれないけど、安心してね。私がついてるから。さ、もう少しこの道を歩いてみよう」

〈主人公〉

「はい……！」

※十秒ほど足音のみが流れる。

二人、一度はよい雰囲気になるものの、その後、そのまま無言が続く。

サリアはこの重苦しい雰囲気を断ち切る言葉を探すが、何も言えず、ただ自室の椅子に座り続けるだけとなる。

こうなってしまうと、自分はまだにも無力だ。

ただ自分のナビが正しい事と、主人公が無事にこの山を抜けられる事を祈るしかない。

ああ、少し、意識が遠くなってきた……。

主人公、淡々と歩き続けている。

妖精さんの事は気になるが、今の自分に何もできないのは事実だ。

であれば、少しでも早くこの山を抜けて、安全な場所に行く。

そうすることで、妖精さんを安心させるほかないのだ。

無事に街にたどり着いたら、しばらく冒険には出ずに滞在しよう。  
妖精さんのおかげで、自分はだいぶ生活に余裕が出てきた。

妖精さんを動かしている人——魔法使いさんの体調がよくなるまで、しばらく休暇を取ってでもいいだろう。

だから、もし、一緒にしばらく休めることになったら——……。

※ここでSE2がストップする。

しばらく休めることになったら、もう一度伝えたい。

私は妖精さんの正体がたとえどんなものであっても、妖精さんの事が好きだって。  
私にはあなたしかないって。

あなたが、私の世界のすべてなんだって。

主人公、すぐ近くまで来ていた魔物に気づかず、反応が遅れる。

鳴き声で存在を察知した時にはもう遅い。

魔物は瞬く間に主人公に飛び掛かり、そのまま——……。

SE3 .. 魔物が近づく足音  
【最初から最後まで流す】

SE4 .. 魔物の鳴き声  
【最初から最後まで流す】

SE5 .. 主人公が転ぶ音  
【最初から流す】

【0―4秒ほどまでの、最初の転ぶ音のみ流す】

SE6 .. 魔物の鳴き声

【SE4と同じ音】

【最初から最後まで流す】

ここで一度音声途切れる。数秒後に復帰する。

数分後。

サリア、目を覚めます。

……うん？

今、何か音がしたような気がする。

一体、なんだろう。勇者ちゃんがドジって、木にでもぶつかったとか？  
声は特に聞こえなかったけど……。

サリア、不思議に思って主人公に声をかける。

※ここから、サリアの声をノイズがかった処理にする

「大した事ではないと思っている」

勇者ちゃん？ 今何か、変な音したけど」

サリア、問いかけるが、なぜか返事はない。

だが、最初の物音以外に、別の大きな音が聞こえる、あるいは聞こえたわけでもない。  
たとえば足を滑らせて崖から落ちたとか、突然モンスターが飛び出してきたとか、そう  
いった事ではないだろう。

機械人形の集音機能が、いよいよイカれてきたのかもしれない。

「優しく尋ねる。まだ事態を理解していない」

勇者ちゃん？ 大丈夫ー？ 何かにぶつかったのかな？  
お姉さんの声聞こえるー？」

まだ返事はない。でも、他の大きな音も聞こえない。

だが、何かがおかしい。

だって、たとえこちらからは聞こえづらくなっても、向こうには問題なくサリアの  
声が聞こえているのなら。

……サリアの呼びかけに、主人公は、大きな声で返事をしてくれるのではないか。

自分はそれを、少しくらいなら聞き取る事ができるのではないか……？

「いよいよ不安になる」

勇者ちゃん……？」

呼んでも、辺りは静まり返ったままだ。

これでは、サリアの方が、他に誰もいない、何もない。何の音もしない場所に放り出さ  
れたような気分だ。

「不安で声が震える」

ねえ。勇者ちゃん。そこにいるよね。あたしが聞き取れない、ただだよね」

……えっ。おかしいな。でもこれ、機械人形が壊れてるだけだよね。

本当は主人公ちゃんは全然無事で、ずっと返事してくれてて。

ただあたしが、それを聞き取れないってただだよね。

あーだけど、さっきから、なんか、木が揺れるみたいな音は聞こえる……？

じゃあ、どうして主人公ちゃんの返事はないんだろう？

どうして、何度も呼び続けるあたしに『妖精さん』って応えてくれないんだろう？

……えっ。主人公ちゃん、今、どうなってる？ どこにいる？

まさか、まさか……。

サリア、とうとう大きな声を上げる。

『妖精さん』の声を作る事も忘れて、必死で呼びかける。

※ここで初めてサリアの声になる※

「サリアの声で、必死に呼びかける」

ねえ！　お願い。返事して……！　そこにいるんだよね。一体何があったの？

ねえ………！」

※ノイズがさらに大きくなり、雨の音をかき消す。その後、フェードアウトして終了。